

対象

- ①～⑤全てに該当する人
- ①申請時に市内に住民登録のある人
 - ②がん治療などにより生殖機能が低下する、または失う可能性がある人と診断された人
 - ③指定医療機関で妊孕性温存治療を受け、凍結保存時の年齢が 43 歳未満の人
 - ④妊孕性温存治療開始日において、以下の事業に基づく助成を受けていない人
 - ・静岡県特定不妊治療費助成事業
 - ・伊豆の国市不妊不育症治療費助成事業
 - ⑤伊豆の国市や他市町村、静岡県などが実施する妊孕性温存治療費の助成を 2 回以上受けていない人

助成対象治療および上限額

- 妊孕性温存治療に要する費用のうち、保険適用外の費用
 - 体調不良などにより治療を途中で中止した場合、それまでに要した費用
- ※以下の費用は対象外です。
- ・入院中の食事代、文書料
 - ・凍結保存の維持（2 回目以降）に係る費用
- 申請上限
1 人につき 2 回まで

対象治療	1 回あたり上限額
精子凍結保存	2 万 5 千円
精巣内精子採取術による精子凍結保存	35 万円
胚（受精卵）凍結保存	40 万円 （県事業*1 併用の場合：5 万円）
未授精卵子凍結保存	40 万円 （県事業*1 併用の場合：20 万円）
卵巣組織凍結保存	40 万円

*1 静岡県小児・AYA 世代（15 歳～ 39 歳）のがん患者等の妊孕性温存支援事業

申請方法

- 提出**／健康づくり課窓口（韮山福祉・保健センター）で
- ・必要書類は市 HP から確認・ダウンロードできます。
- ※郵送・オンライン申請不可
- 締切**／治療費を支払った年度の 3 月 31 日まで
- ※例：支払日が 9 月 1 日（火）の場合…令和 9 年 3 月 31 日（水）まで
 - ※やむを得ない事情で期限内の申請が難しい場合はご相談ください。

その他助成

- 温存後生殖補助医療費助成
- 若年のがん患者が凍結保存した胚などを用い、生殖補助医療を受けたときの助成
- ※詳細は、市 HP をご覧ください。

Information
お知らせ

希望を持ってがん治療に取り組むために
若年がん患者のための
妊孕性温存治療費助成

健康づくり課
055-949-6820

将来、子どもを産み育てることを望む若年のがん患者が、がん治療開始前に生殖機能（妊孕性）を温存するための治療費用を助成します。



▲市 HP

平日の集団検診（予約不要）

実施日		会場	実施日		会場	実施日		会場
9月	4日(金)	葦⚠	10月	1日(木)	ア	10月	27日(火)	ア
	8日(火)	大		6日(火)	ア		2日(水)	ア
	11日(金)	葦😊		9日(金)	葦	12月	4日(金)	葦😊
	18日(金)	葦		15日(木)	葦😊		9日(水)	葦
	24日(木)	葦		21日(水)	葦		10日(木)	ア⚠
	28日(月)	葦😊		23日(金)	大			
				26日(月)	葦😊			

会場／韮山福祉・保健センター
ア：アクシスかつらぎ
大：大仁庁舎

混雑が予想される日
託児可能日

- 受付時間**／【午前】9 時～ 11 時
【午後】13 時～ 14 時 30 分
- 定員**／【午前】100 人【午後】60 人
- ※乳がん検診は女性技師が行います。
※検診の詳細・注意事項などは、検診ガイドをご覧ください。
- 託児のご案内（要予約）**
- 託児可能日は、検診中、保育士がお子さんをお預かりします。
- 時間**／9 時～ 11 時（検診終了まで）
- 対象**／6 カ月～就学前までの乳幼児
- 料金**／無料
- 予約**／希望日の 2 日前までに市公式 LINE または電話で

市公式 LINE からの託児予約手順

- QR から友だち追加
- メニューの「健康」を選択
- 「がん検診」を選択
- 「集団検診日程・予約」を選択
- 「集団検診時の託児予約」を選択
- 「新規予約」を選択

予約フォームに必要事項を入力して予約

休日の乳がん検診（要予約）

- 平日の受診が難しい人のため、休日に乳がん検診を実施します。
- とき**／10 月 17 日（土）13 時～ 15 時 30 分
- ところ**／伊豆保健医療センター
- 検査方法**／マンモグラフィー
- 定員**／先着 17 人
- 予約**／9 月 14 日（月）～
伊豆保健医療センターに電話で
0558-76-6820
※平日 14 時～ 15 時 30 分のみ受付

Information
お知らせ

検診で早期発見を
子宮頸がん・乳がん検診
（集団検診）

健康づくり課
055-949-6820

子宮頸がん検診・乳がん検診の集団検診が始まります。子宮頸がんは、20 代～ 30 代で、乳がんは、30 代後半～ 40 代にかけて急増しています。早期の段階では自覚症状が少ないと言われています。定期的に検診を受け、早期発見することが大切です。

